

ヨハン・ガルトゥング氏の『日本人のための平和論』は、示唆に富んでいる。柔らかな精神で、事柄を自由に捉えている。平和はガルトゥング氏のように、事実を直視し、将来を展望したビジョンから構築できるのではないか。続きを紹介したい。

日本の外交と防衛に関して4つの提言をしている。① 尖閣列島や北方四島など、領土問題で緊張感が高まっているが、共同使用にする。利益を40%ずつに分割し、残りの20%を環境保護と管理費に充てる。② 東北アジア共同体を構築する。アジアに視点を向けた政治家たちは米国から追放されてきたが、日本の進むべき道は、これに限ると、私も確信する。③ 専守防衛に特化する。軍拡競争を刺激しない武器を保有して、日本の国境線を守る。④ 対米従属から決別し、日本独自の方法で東アジアの平和に貢献する。米国と関係を切るとはもちろんないが、植民地的レベルの米国従属は平和に反し、大きなリスクを負うことになる。米国一辺倒ではなく、アジアとの関係を深めることが平和を生み出す。

日本に原子力発電は不要である。エネルギーは十分に確保できる。地震と津波が多発する日本に原発は危険過ぎる。廃棄物処理法が分かっていない以上、黒死病のような核エネルギーは放棄すべきである。原発にミサイルが撃ち込まれると收拾がつかないし、テロの標的になる。原爆保有のためのプルトニウム抽出など、もつての外である。

テロリズムは現代世界の緊急な問題である。自分と考えの違う人々をテロリストと呼び、排斥することなどは論外であるが、テロリズムは世界に蔓延し、人々を恐怖に陥れている。ガルトゥング氏は西欧の植民地政策に遠因があり、米国の武力による制圧では解決しないと下記のように書いている。「私が苛立ちを覚えるのは、どの国もさまざまなテロ対策を講じるのに、なぜ根底にある原因を取り除こうとしないのかということだ。…暴力の根底にはトラウマと対立がある。私たちは何がトラウマになっているかを見極め、対立の原因を知る努力をする必要がある。そのためには、もしかしたら将来テロリストを輩出するかもしれない集団とも腹を割って対話し、彼らと敵対している自分たちの立場を自問することも必要である。」そして、「100%成功する和解の方法があると考えるほど私は愚かでない。あらゆる戦争や対立に効く万能薬はない。だが確かに言えることは、何もしなければ日本は相次ぐテロの標的になるということである。だれもそんなことは望まないはずだ」と、イスラム国家を収奪したことなく、友好的な日本に対話の可能性があると勧めている。これらの提言は、数々の国際紛争を調停してきたガルトゥング氏の体験から引き出された平和論で、説得力があり、誰でも納得できるのではないかと。不可能に見えても、相手の懐に飛び込み、共通理解を求めつつ、平和へのビジョンを持つ創造的な対話を訴えている。

「平和の文化をつくる」という項からの論述である。反戦・反軍拡という消極的平和から積極的平和へと意識を広げることが大切である。集会・デモなどの抵抗、反対、阻止運動は消極的平和のための行動である。重要な行動であるが、共感や賛同は十分に得られない。未来志向のアイデアを提案し、前向きで、肯定的な積極的平和のメッセージを発する必要がある。日本の護憲論者は9条に安住し、国家間の対立や戦争のことで頭を悩ませる必要を感じて来なかった。9条は反戦憲法であっても平和憲法ではない。反戦憲法から平和とは何かを明記し、公平と共感の精神を掲げる積極的平和の構築を明確に打ち出す真の平和憲法にすべきであると主張している。私は、9条は「前文」とセットにして、積極的平和のメッセージとし、これをいかに実行するかにかかっていると思っている。